

AO 法骨折治療 [英語版 DVD-ROM 付] 第2版

Thomas P Ruedi, Richard E Buckley, Christopher G Moran ● 原書編集

糸満盛憲 ● 日本語版総編集

田中 正 ● 日本語版編集代表

〔評者〕永田見生 (久留米大主任教授・整形外科学)

医学書院発行の『AO 法骨折治療 第2版』の書評の依頼があり、運命的と感じ執筆を引き受けました。その理由は、私が1981年4月から、当時、Otto Russe 教授が主催されていたオーストリアのインスブルック大学病院災害外科に留学し、当時はわが国での普及がまだ不十分であった AO 法を1年間研修したからです。当時、久留米大学は九州大学出身の宮城成圭教授が主催され、骨折治療は神中、天児式でした。骨接合術の固定器具には天児式プレートなどを使い、AO が提唱する解剖学的整復と頑丈な器具による強固な固定法には批判的でした。インスブルック大学病院着任時は手術助手を数例務め、早々に執刀医を命じられましたが、AO 器具の使用経験がなく困りました。スクリュー刺入時にタップを切るなど初体験でしたので、学内の書店で『Manual der Osteosynthese, AO-Technik』を購入し、AO のコンセプトを必死に勉強したのが昨日のことのようです。この本は、日本で翻訳され『図説骨折の手術 AO 法』として1970年に医学書院から発行されています。当地で200例を越す手術に携わる中で、AO の原点は、骨折のみを治すのではなく患者を適切に治すことにあるのだと学びました。これは、ヨーロッパの人達の運動器障害と生命とは同等、すなわち、命があっても行

動ができなければ生きている意味がないとの考えが根底にあるからであると感じました。したがって、このような国民性に応えなければならない災害外科医の心構えがわが国とは異なることを実感しました。

さて、『AO 法骨折治療 第2版』は AO グループ骨折治療マニュアルとして世界に発信されたシリーズの第4弾で、世界展開中の AO コースの内容をさらに学術的に深く掘り下げたものです。本書の冒頭に、糸満北里大学名誉教授をはじめ AO Alumni Association Japan Chapter の役員一同が、21世紀の外傷治療学のバイブルともいえる第4弾の翻訳を受け持ち、興奮を覚えながら完成させたと述べられています。

AO のコンセプトも1981年当時と現在とでは決定的な違いがあります。1981年当時の治療目標は、①解剖学的整復、②安定した骨折固定(絶対的安定性)、③血流の温存、④患肢と患者の早期運動で、絶対的安定性は、初期にはすべての骨折に適応され、術者はすべての骨折に対して、粉碎された茶碗を原型に復元するかのように必死に整復を試みていました。しかし、現在のコンセプトは、絶対的安定性は関節内骨折や特定の骨折にのみに要求され、血行や軟部組織を損傷せずに行える場合のみに限られています。そして、骨幹



部骨折では、長さ、アラインメント、回旋は矯正するが、骨折部の解剖学的整復は必要がないという相対的安定性の確保という概念へと治療目標が変革されており、このことはわが国の先哲の見識に通じるものがあります。

本書は AO グループが総力をあけて完成した骨折治療マニュアルであり、完成された日本語訳からは外傷治療に対する和訳担当者の気概が伝わってきます。本書には手術手技が習得できる CD-ROM も付いており、外傷学に携わる方々はぜひ詳読していただきたいものとなっています。

A4 頁752 2010年
定価39,900円(本体38,000円+税5%)
医学書院 刊